

龍源寺報

平成29年 正月号

臨濟宗・妙心寺派
住職 松原信樹
佛母寺住職 松原覺樹
正福寺住職 松原行樹
TEL 3451-1853
FAX 3451-6094

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com

URL: http://www.ryugenji.com

新年におもっ

龍源寺では、毎月一回、禅の会(坐禅体験)を主催している。坐禅をし、禅の語録や経典を読む。過去の優れた思索の成果に学び、自分の置かれた現実をみつめながら、人間と世界のあり方について考え、よりよく生きる道を定めていく。

どのような人でも、毎日をいかに過ごすかを考えていると思う。身近なことで言えば、毎日の食事のこと、何時に起きて、何時に寝るか。会社を続けるべきか、辞めるべきか。私達の日常とは、こうした決断の毎日である。

決断をしなければならぬことに悩まされている人は、意外と多い。私の友人は、レストランで何を注文してよいかわからないという。つまり、何を食べたいのかが分からないという。奥さんに「何を頼むの?」と言われ、いつも「何でもいい」と言うことから、夫婦喧嘩になるという。これは、友人だから私に伝えてくれたことであつて、普通、人はそのようなことを表だつて議論などしないことの方が多い。このような例は、些細なことだが、人は、多くの場合、無言のまま、誰にも相談できない重大な問題を抱えて、悩みながら生きていく。ともすると、問題を墓場まで持つて

いつてしまふケースも少なくない。パスカルは指摘する、「人間は、小さなことで傷つきやすいので、だからこそ、また、小さなことで慰められもするのである」と。

人生の実態は、成功することができずに、失敗し、多くの困難に苦しみ、悲しみを余儀なくされるところにこそあると思う。西田幾多郎は、「人生の悲哀、その自己矛盾」を繰り返して語った。松原泰道は、「雨の日は、雨の日の生活を。晴れの日は晴れの生活を」と、どんなつらいことがあつても、その場に成りきつて生きることを教えてくれた。私の場合、要領が悪く、やり直しの連続かもしれないが、失敗をしても、こういうことが生きるということなのか、それならば、もう一度と勇気を奮い起こして生きていこうという気持ちをもち続けたい。

人生の根本にある問題を掘り下げ、自己に問う場が、月一度龍源寺で行われる坐禅会や法話会である。私が、坐禅会や法話会などで、語りかけ、縁を持ちたいと思っている人は、優しく、傷つきやすく、心豊かで、苦しみながらも立派に生きる務めを果たそうとしている人達である。対話をし、問題意識を分かち合い、生きていく現実を見つめ、今年も、皆さんと共に輪を広げていきたい。

寄付

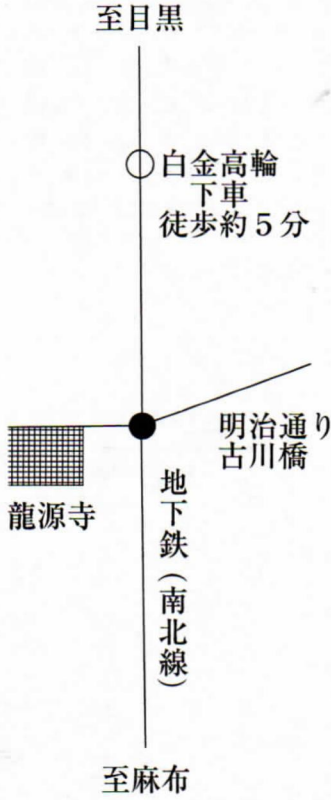
金十万円也 齋藤健 殿

金三万円也 保坂 殿

松原泰道 墨蹟 田尻 殿

ありがとうございました

※将来は、本堂の裏地を整理して、大般若経を納める経蔵を建立する計画をしております。



大般若会(お正月の祈祷法要)

左の通り行ないます。ご家族そろってお参りください。

一、一月七日(土曜日・午前十時より)

一、読経

一、法話

※駐車場はありません。南北線をご利用ください。

※本年は、午前十時より厳修します。時間につけてください。

龍源寺への交通の便(地下鉄)

●都営三田線

(目黒または三田、南北線は白金高輪駅下車。徒歩五分)

●2番出口から地上に出ると案内看板に「龍源寺」名あり

龍源寺への交通の便(都バス)

●田87 渋谷駅—田町駅 魚ラン坂下下車

●都06 渋谷駅—新橋駅 古川橋下車

●品97 品川駅—新宿駅西口 魚ラン坂下・古川橋下車

●反96 五反田駅—品川駅—六本木ヒルズ(循環)

魚ラン坂下・古川橋下車

●東98 東京駅丸の内南口—目黒駅 魚ラン坂下下車

龍源寺の歴史について(七)

松原 泰道

龍源寺が現在地に移ったのは、たびたび記しますように、今から二百六十九年前の元祿十一年（一六九八）二月五日であります。

当寺に今残る記録は、寛保二年の「縁起」と文政十一年の「書上げ」（絶外和尚筆）だけで、中でも当寺第四世の絶外和尚（一七三九寂）の文章が唯一のよりどころです。

この絶外和尚文書と奥平家祐筆の過去帳以外には文献は一つもなく、建造物についても記録はありません。

ただ寺の住職の法系だけは断絶することなく継がれておりますことは、本山妙心寺史や妙心寺法系図で明らかであります。

龍翔院（龍源寺の古称）は延宝二年（一六七四）に妙心寺の末寺

となつています。開山越溪禪師が渋谷の吸江寺開山石潭禪師の道奥を極めたことも前に申し述べました。その法系を重ねて十三世俊外和尚（一九一五寂）は当寺に三十年間住職し、転じて曹溪寺の住職となりましたが、その頃、当寺は非常に荒廃して見るかげもなかったようでありました。それは当時の古老や先住職から私はたびたび聞いております。

俊外和尚が当寺を去るに際して迎えたのが輝外文器和尚であります。師は岐阜の葛谷勘兵衛二男に生れ、上京して浅草海禪寺で学び二十八才で龍源寺住職に任じられました。寺運の挽回につとめましたが、間もなく病を得て明治三十八年八月に寂しました。在寺僅か四年、三十二才でありました。

文器和尚がなくなると、岐阜県可児郡帷子の真禪寺の副住職であった文器和尚の実兄の祖来和尚が寺務管理に当寺に招かれました

が法類寺院や檀家総代の委嘱で、明治四十年九月十八日に龍源寺住職に任命されました。先住職であり、私の父師であります。

その頃の寺の経営は極度の困難にあり、莫大の借財がありました。このことは故和尚やお檀家の方から、私も幼少時代によく聞かされたので、はつきり記憶しております。

昭和二年に当山開山二百五十年遠忌法要にあたり、大導師をつとめられた松島瑞巖寺の盤龍老師は当時を追想して

「祖来和尚、龍源の堂宇荒廃を見て悲歎し復興の志を発す、然るに食せんと欲するも米麦も器皿もなし。寝んとするも臥褥なし。朝辛暮苦は言語も及ばす：：」と筆を走らせておられます。（この文書は現存す）当時の状況が如何なるものであったかが察知されます。



柳緑花紅

明けましておめでとうござい
ます。旧年中は、寺族一同大
変お世話になりました。本年
も宜しくお願い申し上げます。
▼新年の祈祷会は、一月七

日・午前十時より行います。毎年十一時
から行いますが、他寺との兼ね合いで時
間の変更になりました。無病息災・家内
安全・交通安全を祈願致します。転読す
る経典は、写経会の皆様が生経してくだ
さった『大般若経』です。六百巻あるう
ちの二百巻完成しております。数名の僧
侶で読経させていただきます。皆様ご参
加ください。宜しくお願い申し上げます
▼法要の後、花園会館でお食事をする場
合、イスと机で会食ができるようになり
ました。人数に制限がありますが、ご利用
ください。また、悪質な違法駐車が多
く、半年前より門に「車両進入禁止」の
立て札を立てております。お檀家さまに
は、車で御来山の折、立て札をよけて境
内に入車してください。お手数をおかけ
します。本来は、どなたでもお入りくだ
さいとの意味で、門を外した泰道和尚の

ことを思うとやりきれない気持ちでいっ
ぱいですが、しばらくは、この形をとり
たいと思います。▼お檀家様でお葬式を
だされる場合、知っている葬儀社がない
方は、信頼のある葬儀社を紹介させてい
ただきます。いざ、ご家族が亡くなると、
なすべき事がたくさんありすぎて、慌た
だしいのが現状です。仏事に慣れている
僧侶の私でさえ、非常に慌ただしい体験
をしました。もし、お葬式をだされる場
合、僧侶がいなくとも葬式ができないゆ
えに、まず、一番はじめに龍源寺にお電
話を入れていただきたいと思えます。龍
源寺本堂もしくは、花園会館を使用して
のお葬式・家族葬・密葬も執り行うこと
ができます。(本堂・花園会館使用の際
は、指定業者となります)▼渋谷区広
尾にある東北寺内龍源寺墓地・合同船は、
墓地の継承者を気にしなくてもよい永代
供養塔です。龍源寺の規則を守っていた
だければ、どなたでもこのお墓を使用で
きます。▼ポプラ社より『つながる仏
教』という本を、哲学者の大竹裕氏と監
修させていただきました。「ぶつちやけ

寺」というテレビ番組に出演されている
四人の僧侶の方の対談集という形で、と
ても読みやすい内容になっております。
また、一月にPHP研究所から禅の本が
出版されます。大般若会の折、ご紹介で
きると思えます。私の中でも思いが入っ
た一冊になりました。▼今年は、はじめ
て、祖父や父が行っていた、地方のお寺
のお檀家さまに妙心寺の管長さんに代わ
ってお話しをするという「巡教」にでる
ことになりました。身を引き締めて精進
していきたいと思えます。娘の瑞樹も六
ヶ月が経ち、健やかに育つてます。妻の
亜矢は、育児休暇中で育児に専念する毎
日を送っております。母は毎日元気に過
ごしております。少しずつ昔着ていた洋
服の整理などをするようになりました。
必要なものは必要なものとし、不要なも
のは不要なものとして整理をするという
ことが、家族の中で浸透しているよう
です。▼一月七日十時・新年の大般若会
(お正月の祈祷法要)で皆さまにお会い
できる事を楽しみにしております。どう
ぞ、ご家族でお参りください。(信樹)